

月刊 ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊32年目 **Nr. 376**

2021年3月号



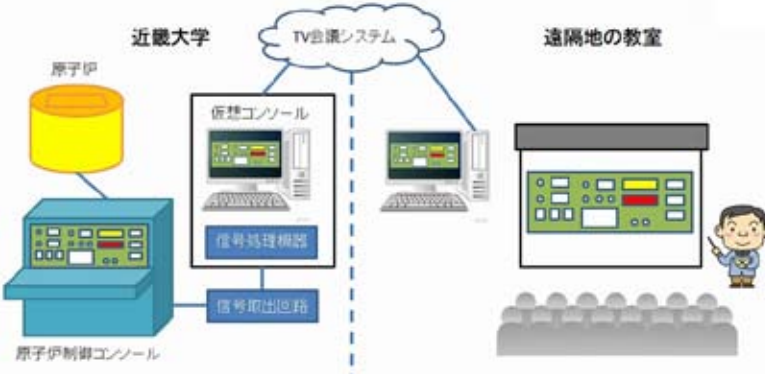


杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 109

原子力人材育成に係る産学官連携のプラットフォーム、原子力人材育成ネットワークの二〇年度報告会が二月一六日に約二二〇名が参加してオンラインで開催された。原子力教育における遠隔ツールの活用をテーマに、小原徹氏（東京工業大学先端原子力研究所教授）のもと、パネル討論が行われた。

喜連川優氏（国立情報学研究所所長・東京大学生産技術研究所教授）は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い大学教育における「対面から遠隔への転換」支援策を披露。行政機関や全国の大学・高専などと連携して遠隔講義での著作物の無償利用が可能となった成果を紹介。「学びのスタイルが変わりつつある」として、今後もIT技術を通じた高等教育の向上に取り組んでいくと述べた。

若林源一郎氏（近畿大学原子力研究所教授）は、研究炉を用いた実習に関し、研修生の旅費と原子力規制の課題をあげ、TV会議システム



<https://www.jaif.or.jp/journal/japan/6658.html>

近畿大学が構想する原子炉遠隔実習システムのイメージ

テムを通じ研究炉を持たない国にも原子炉実験の機会を提供するIAEA（国際原子力機関、本部はウィーン）の取組みを本本とした原子炉遠隔実習システムを披露。現場での実習に替わる有効な手段として期待を寄せた。

高田英治氏（富山高専専門学校教授）は他校へも配信する原子力人材育成eラーニングのカリキュラムを紹介。今後の課題としてコンテンツの充実と若手高専教員の裾野拡大をあげた。また、各国若手の育成に向けた原子力エネルギーマネジメントスクール（NEMS）に関する中国雅臣氏（IAEA原子力エネルギー局上級知識管理官）は、オンラインを通じた国際イベントを開催する上で、地域間の時差が最大の問題と指摘。一般参加者を交えた討論ではセキュリティ対策についても質疑があった。

ネットワークは設立から十年を迎え、それぞれ初代の運営委員長と事務局長を務めた服部拓也氏（原産協会顧問）と筆者（サン・フレア校長）が当時を振り返るとともに、発足四ヶ月後に福島第一原子力発電所事故が発生し新たな課題に対応してきた経緯を語った。また、NEMSの日本誘致に貢献した花光圭子氏（ITER機構）が仏よりオンライン参加。「ネットワークを活かした実習が続いていることは意義深い」と日本が主導する原子力人材育成の取組に期待を寄せた。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市出身の偉大な物理学者（その二）を紹介したい。エルヴィン・シュレーディンガーは一八八七年にウィーンに生まれ、一九〇六年にウィーン大学に入学して物理学を専攻。二才で博士号を取得した。卒業後は、同大学第二物理学教室の助手を務める。第一次大戦で兵役を務めた後、シュツットガルトなどの大学で電気学、光学などの研究に従事。二一年にチューリヒ大学の理論物理学教授に就任して量子力学の研究に取り組み、量子のミクロな運動を記述するシュレーディンガー方程式を導出した。アインシュタインは「あなたの仕事のアイデアは真の天才の証明です！」と手紙の中で賞賛。二七年にはベルリン大学理論物理学教授に就任。三三年にはドイツ

ラックとともにノーベル物理学賞を受賞した。ナチスの台頭により英国に亡命し、五八年に祖国に戻りウィーン大学特別教授に就任。五八年に大学を退官。普遍的教養を持ち、著作も広範囲にわたったことが特筆される。

一方、一九〇六年に東京に生まれた朝永振一郎は、一三年に京都市に移り、三高から京都帝国大学に進み、物理学科卒業後は同科の副手に着任する。湯川秀樹とは中学、高校、帝大、就職とも同期。三一年、仁科芳雄の誘いを受け、理化学研究所仁科研究室の研究員に着任。マグネトロンが発振機構の研究等を行う。独ライプツィヒに留学し、ハイゼンベルクの研究グループで場の量子論等を学ぶ。四一年、東京文理科大学（現筑波大学）教授。四七年、量子電磁力学の発散の困難を解消するため繰り込み理論を発明し、理論値が実測値と一致する結果を得た。この業績により、六五年にシュレーディンガー、ファインマンと共同でノーベル物理学賞を受賞。教授となつてからも東京大学の五月祭で特技のドイツ語による落語を演じるなど、洒落っ気が多かった。五六年から六一年には東京教育大学長、六三年から六九年には日本学術会議会長に就任。晩年は中学校などでも講演を行い、自然科学の啓蒙にも積極的に取り組んだ。

余談であるが、筆者は学生時代にディラック著の「量子力学」（朝永振一郎他訳）を勉強していたが、「シュレーディンガーの猫」というパラドックスは難しくよく理解できなかった。今月も両市出身の偉大な物理学者を紹介することができた幸運に感謝しつつ、編集部撮影をお願いしたウィーン大学中庭回廊にあるシュレーディンガー記念像の写真を掲載させていただく。

余談であるが、筆者は学生時代にディラック著の「量子力学」（朝永振一郎他訳）を勉強していたが、「シュレーディンガーの猫」というパラドックスは難しくよく理解できなかった。今月も両市出身の偉大な物理学者を紹介することができた幸運に感謝しつつ、編集部撮影をお願いしたウィーン大学中庭回廊にあるシュレーディンガー記念像の写真を掲載させていただく。

余談であるが、筆者は学生時代にディラック著の「量子力学」（朝永振一郎他訳）を勉強していたが、「シュレーディンガーの猫」というパラドックスは難しくよく理解できなかった。今月も両市出身の偉大な物理学者を紹介することができた幸運に感謝しつつ、編集部撮影をお願いしたウィーン大学中庭回廊にあるシュレーディンガー記念像の写真を掲載させていただく。



杉本純の原子力の話II 「ウィーンと京都」の第1回からの全記事が次のサイトに掲載されています：<http://wattandedison.com/Sugimoto.html>



テロ犠牲者追悼碑

ウィーン1区で昨年11月2日夜に発生したテロの現場には、犠牲者のために花や蠟燭、花輪などが数多く捧げられた。記憶にとどめるためウィーン市はこれらをウィーン博物館とオーストリア歴史ハウスに保管した。また芸術家はこれらを材料にして作品を作った。2月下旬、現場にテロ犠牲者追悼の記念碑が置かれ、ウィーン市長と1区区長により除幕式が行われた。ウィーン交響楽団吹奏四重奏団がブルックナーとパッサリの作品を演奏した。

